

特定研究開発促進事業

日本海南西海域に生息する“シロイカ”（ケンサキイカ・ブドウイカ）に関する共同研究 （昭和58年度調査結果要約）

森脇晋平

日本海南西部沿岸海域において“シロイカ”（ケンサキイカ・ブドウイカ）は最も重要な漁獲対象種として、沿岸漁家経営における依存度は高い。しかし、それらに関わる漁場形成や生物学的知見はとぼしい状態である。

このため、日本海西部4県（山口県～兵庫県）は昭和56年度より国の指定を受け、5ヶ年計画をもって本種の資源生物に関する基礎調査をなし、資源診断、漁況予測技術の確立を目指して広範囲な共同研究を実施しつつある。

これまでに得られた結果は、「日本海西部海域に生息する“シロイカ”（ケンサキイカ・ブドウイカ）に関する共同研究報告書 第1号」にとりまとめたが、本報告は昭和58年度の調査結果の概要について述べ、詳細は「共同研究報告書 第2号」（仮称）にとりまとめ後日報告する。

調査結果の概要

1. 漁業実態調査

各県（山口～兵庫）の代表港における漁獲量を調査し、漁業者に操業日誌の記入を依頼した。

1983年の漁獲量については4～6月の漁期においては若干の漁期の遅れが見られた。変動係数は赤碓（鳥取県）が高く、東西に離れるほど低い傾向がみられた。標本船の月別の漁獲量は9月が高く、10月、8月、11月、7月、6月、5月の順で低くなっている。

2. 生物測定調査

各県の代表港での“シロイカ”小型一本釣り漁船により漁獲された“シロイカ”の外套背長組成を調べた。

雌雄とも海域別には山口県海域のものが他海域に比べて圧倒的に大きく、他海域は大差がなく、同様の平均値をとって移動しており、過去の結果と同様の傾向である。

3. 標本船調査

“シロイカ”一本釣り漁船の操業日誌を基に、漁場位置の季節変化ならびに漁獲量の動態を検討した。

初漁期には岸寄りの相対的に浅い水域に漁場が形成され、漁期が進むにつれて沖合寄りの深所に移動すること、漁場の“沖合化”は西に早く東に遅いこと、隠岐海峡の漁場では地形的条件の影響が予想されること、など全体の傾向としては1982年の結果とよく一致している。

また、隠岐海峡以西の島根・山口沿岸の漁況の季節変化に1982年と1983年で明瞭な差異が認められ、春漁型から秋漁型へ変化している。

4. 標識放流調査

1983年に山口～兵庫の4県が日本海南西部沿岸域で実施した標識放流の再捕結果に基づき、“シロイカ”の漁獲率を推定した。

1983年には4,091尾の標識放流が行われ、137尾の再捕報告があった。Gulland(1955)の方法を適用して漁獲率の推定を行なったところ、釣りによる漁獲率は1.3～6.7%で山陰東部海域では山陰西部水域より高い傾向が認められた。定置網、底曳網、棒受網による“シロイカ”の漁獲率は釣りの漁獲率に比較して低く、1%に達しない。